

日本軍の戦史記録と台児庄敗北論

姜 克 實

一、記録史料と口伝歴史

歴史研究において、もっとも重要なことは史料で根拠を示すことである。史料には色々な種類があるが、口述記録もその中の一つである。最近では、オーラル・ヒストリー(oral history)の方法が流行り、研究者も含めて多くの人々は文献資料をよそ目に口述記録の収集に執心している。とりわけそれは、近、現代の記録の面で盛んなようである。歴史事件の当事者を探し当て、話を記録し、あたかも証人の口述こそ、最も信頼できる歴史の真実かのように扱うのである。筆者は、口述の証言を認めないわけではないが、無批判に口述資料を優先に信頼、採用する方法には、問題があるのではないかと考えている。もし、いかなる文字記録も失われてしまった場合、事件の当事者を探し当て、直接話が聴けることは確かに重要で、証拠にもなり得るが、同時にこうした口述記録の弱点をも認識しなければとんでもない間違いが生ずることさえある。特に最近の戦争体験記録に多く見られる、半世紀以上が経った一人だけの事後談の場合、口述された内容は、歴史の真実と大きくかけ離れる場合もある。

オーラル・ヒストリーによる証言が比較的リアルに伝えるのは、ある事件で当事者が一瞬に植え付けられた強烈な感情的印象で、例えば事件に与えられた感動、驚愕、苦痛、悲傷、憤りなどであるが、一方、研究に必要とする重要な基礎的情報、例えば、事件の発生日、時間、天候、具体的場所、参加者の人数、名前、事件の経緯、結果などについて、正確に記憶する人はほとんどいない。人間の記憶能力には限界があるためである。そのため実際、口述歴史といっても、語り手は事前に何らかの参考のための再学習——歴史の文献、他人の口述、研究論文などの学習、参考——を行わなければ、断片的感情の記憶以外、条理ある叙述、事件全貌に関する把握はできない場合が多い。そのために取材する前の再学習が行われ、歴史の文献や他人の口述を参考にして自分が忘れた、知らなかった記憶の穴を埋めるのである。これすなわち、同一事件に関する複数の回想、事後談によく見られる、重複現象発生理由である。明らかな間違いでも、互いに共有してオーラル・ヒストリーの虚像を固めていくのである。

その他、調査者の目的、時代背景、政治環境、被調査者の社会地位、個人の虚栄心なども、口述の内容と調査の結果に大きく影響する。事前に設定した「大捷」「大敗」のような目的性のある宣伝テーマ、「惨劇」、「虐殺」に対する提訴が目的とする調査、企画は、質問テーマ、誘導式質問の方法を通して相手に伝わり、事実の選択に傾きをもたらすだけでなく、口述者自身の「演出」意欲、自己表現、自画自賛の虚栄心を刺激することも多々あろう。ゆえに、口述から得

た話しは、単独では事実の根拠になりえず、その価値はあくまで文献資料の補助的手段、参考的地位にあることを認識しなければならない。もし、当時の文献記録が存在する場合、事後の口述の記録を優先的に採用してはならないのは、歴史学の方法の鉄則なのである。

中国国内における「平型関大捷」「台兒庄大戦」に関する認知、研究、記録の結果は日本にある文献記録史料と大きく異なり、神話、故事化された大きな理由の一つは、口伝の方法にあるのではないかと思う。この場合、歴史記録の基本的根拠となるものは、確かな文献記録ではなく、大半は戦闘経験者の軍人、将校の回想録、武勇談であり、その中には、事後半世紀以上の当事者への取材、聞き取りなども多く含まれていた。その上、政治宣伝、愛国主義教育の政治色も重ねられ、予め設定した政治宣伝、思想教育の目的に沿って「平型関大捷」「台兒庄大戦」の歴史像が加工され、一方的な抗日武勇談の材料のみかき集め、政治文書(宣伝資料)としてその時代に機能させ、またその後も利用、継承されてきた¹。このような御用化、政治化の現象も歴史研究を妨げる理由の一つではないかと思う。

以上のような理由で、中国では「平型関大捷」「台兒庄大戦」の形像は一方的に作られ、また時の戦争、冷戦、国家関係の齟齬などの諸事情で、戦う敵手である日本軍側の文献記録が長い間無視されてきた。前世紀80年代以降、中国の改革開放政策によってこれまで不可能だった日本の戦史資料も閲覧、利用できるようになり、さらに2001年以降、日本におけるアジア歴史資料センターの成立によって殆どの歴史記録(公文書、防衛省史料、外務省史料)が一般に公開され、国境なしにそれを利用できる道が広げられた。一方中国国内では、このような好条件は必ずしも活用されたとはいえず、日本の資料を利用して一部の歴史記録に数字面の修正が行われたものの²、依然として、政治の需要に答える状況は変わらず、「平型関大捷」「台兒庄大戦」の場合、学問研究の面において大きな進展が見られなかった³。

旧日本軍に関して、防衛省防衛研究所戦史研究センターに多くの貴重な資料が残されている。貴重と称する理由の一、その大半は口伝ではなく文献記録である。二、後で作られたものではなくほとんどは戦争当時の記録である。三、政治宣伝色のない、軍内部の秘密記録である。

日本軍に関する文献記録を類別すれば、つぎの三種類に分けられよう。

一、事件当時の記録。例えば電報、命令書、計画書、会議記録などである。それを活用することで、事件の時間、場所、発生経緯、経過を精確に把握できる。

二、事件直後の追記である。日記、手記、陣中日誌などはそれである。事件当日から後数日内で作成するものが多く、前者と同様、事件の時間、場所、発生経緯と経過を再現することに高い信頼性がある。ただ個人の日記、手記など非公式な記録も含まれるので、具体的場面の還元に適するが、事件の全局を把握できないものも多い。

三、事後の報告書、記録類である。戦闘詳報、調査報告、統計表類はそれである。この類の資料は、事件とは一定の時間差があり、戦闘後数週間、数ヶ月間に作成されたものが多い。これらの報告類は前兩者にある材料、当事者の報告、記憶などを総合して加工したもので、もともとは統計、総括、反省、記録の目的から作られたので、事件、戦闘全体——原因、経過、結果——の把握に非常に役立つといえる。ただ、記録者の「加工」を経た資料なので、多少の「小

細工」も存在することに注意する必要はあろう。

「小細工」の部分はどこにあるか。筆者は、それは死傷者、戦闘消耗、鹵獲品など統計の数字と結果にではなく、事件経過の叙述、描写の面にあるのではないかと考える。日本軍では各種数字の統計に対する上層部からの要求と管理が非常に厳格であり、その意味は単なる「軍功」、「過失」の集計ではなく、兵員の死傷者数と弾薬の消耗統計が同時に今後の作戦指導、兵員、物資補充の重要データでもあるので、勝手に改ざんすることや、いい加減に統計、報告されることは許されない。一方、この数字統計の結果、経過をどのように表現、描写するかに一定の融通がきくと考えられる。

一つの例を挙げれば、軍人の死亡報告書である。実際の根拠の多くは軍医による検死記録であり、例えば死者の致命傷の部位、被弾の方向などの情報である。一方、家族、行政機関に提出する死亡報告書、あるいはマスコミに公開する戦場報道の場合、作成時家族を慰めるため、あるいは死者を顕彰し、死亡恤金、遺族年金など国家補償を有利にするため、その戦闘負傷、臨死の場面を加工することができる。この場合、死ぬ前の豪語、勇ましい行為などの表現に報告書作成者によって手加減を加えられることはよくある。例えば、山西省靈邱県の小寨村で待ち伏せ襲撃（いわゆる共産党の「平型関大捷」）を受け全滅した日本軍人中の一人、憲兵曹長佐野亀一の死亡報告書には

…佐野曹長は身に数弾を受けたるも之に怯まず、尚も力戦中敵の迫撃砲弾は佐野曹長の傍に炸裂したる為腰及腹部に其の破片を受け、出血甚だしく一時昏倒したり、…曹長は再び意識を回復し、拳銃にて交戦せしが既に弾薬盡きたるを以て、今は之迄なりと軍刀抜き放ち敵陣目撃して切り込まんと立上りたる際又もや敵の手榴弾飛来し、佐野曹長の頭上に炸裂し遂に曹長の後頭部に致命傷を受け爰に名誉の戦死を遂げたり⁴。

とその死に際の壮烈さを記録している。しかし、実際この百人に近い部隊は待ち伏せを受けてほぼ全員が死亡しており、もちろん佐野の最期を観察、記録した人はいないはずである。この英雄話の唯一の根拠は、おそらく、検死時、軍医が提出した死亡原因報告——「致命傷は後頭部による弾片創傷」——だけであろう。武勇談は、この話に沿ってつくられたものと考えられる。

もう一つの例は、武器の損失である。日本軍において、武器の遺棄、敵による鹵獲は非常に重大な過失と見なされるので、そのような事件があっても、戦闘中による損害、不可抗力の原因による放棄などの報告で処理できる。例えば、平型関の戦闘に参加した歩兵第二十一聯隊の戦闘詳報にある、弾薬の損失統計欄には、重機銃実包7200、小銃実包28920、八九式重擲榴弾40の数字が計上されているが、備考欄には「損失弾薬ハ全部料子台ニ埋没中紛失セラルモノナリ」と記録している⁵。料子台は河北省南口附近の地名で、半月ほど前、弾薬が埋没した記録も、『濱田聯隊史』に見られる⁶。一方、八路軍による小寨村での伏撃戦にも部隊の武器弾薬の損失があるはずだが、これに関しては記録が見つからない。誤魔化して料子台の埋没記録と一緒に

処理したのではないかと疑問視される。

その他、戦闘過程における指揮官の過失、作戦のミスも、戦闘全局の報告書においてある程度掩蔽できるし、さらに作戦指導とは無関係の不都合の部分は完全に隠蔽、抹消することさえある。例えば、兵士による虐殺、強姦、略奪などの犯罪行為に関して、実際上日常茶飯事のように発生しているにもかかわらず、戦闘詳報や、陣中日誌に記録されたことは一切ない。台兒庄大戦中の滕県の戦いに関する研究から分るように、日本軍側が記録した「敵遺棄死体」の数には、捕虜、負傷兵の「処分」の数だけではなく、老人、婦女子など惨殺した民間人の死者数も含まれているようである⁷。ゆえに、戦闘詳報など信頼度の高い史料を使用した際にも、このような史料批判の眼が必要であろう。

2. 聯隊史類資料の価値

旧日本軍の編成単位で記録された、各聯隊、部隊の歴史記録も、軍史料の一部である。陸海軍の各兵種、聯隊の単位を中心にその関連資料は一千点以上もあるが⁸、ほとんど戦後、特に高度経済成長期以降1960年代から1990年代の間に作られたものである。戦闘詳報のような、第一次の原史料ではないが、複数の第一次史料を素材に、加工、編纂したものが多。これらの聯隊史類資料を利用する場合、叙述、説明の部分ではなく、芋づる式に、素材となる第一次史料を探し当てる作業が必要である。逆に、史料索引の価値を利用せず、中の記述部分を過信すれば、大きな間違いが生じることさえある。

なぜ、叙述の部分を過信してはいけないか、理由は次の通りである。聯隊史類の書籍は普通、大量の戦闘詳報、陣中日記、個人の手記、日記、回想録などを総合して編集したものであり、その編集者も、叙述者も戦闘経験のある旧軍人だった例がほとんどである。一方、彼らは必ずしも学問的訓練を受けたわけではなく、各種資料の取捨選択、総合解釈に、あるいはそれによる事実の再現の過程に、非学問的操作および主観的な解釈がはいる恐れがある。記述の過程に第一次的文獻記録との照合が欠けることや、文献記録より個人の記憶、回想類への過信、複数の矛盾する史料が同時に存在する場合、その判断、取捨の処理におけるミスなど、度々見られる。また、叙述の過程に個人の感情に任せる加工があったり、史料不十分の時、主観的推測で歴史の場面を再構成したりする還元方法も見られる。その他、聯隊史類書籍は、ほとんど戦後平和の時代に作られたものなので、反戦、厭戦の時代の雰囲気の影響され、戦闘における死傷、被害程度を誇張する傾向も見られる。故に聯隊史類記録の描写、記述、解説の部分について注意を要し、特に証拠の不十分な叙述部分について、原史料による照合、検証が必要であろう。中国国内における「平型関大捷」の研究に、多くの誤解を生じた理由の一つは、この戦闘とかわりがある『濱田聯隊史』（歩二一会、1973年）の記述部分を批判せずに過信したからである。

もちろん、聯隊史類の史料は無用ではなく、それ自体は史料集とする側面が有り、また史料の索引として非常に価値が高い。前にも触れたように、聯隊史類の出版物はほとんど第一次史料を元に加工して構成されているのであるが、その編集、作成の時代に集まった原史料の種類と数は、いま見られるものより遥かに豊富で充実した内容であった。

日本は侵略戦争に負けた国で、戦後、長い間過去は負の遺産として重く人々の精神の上のしかかっていた。敗戦後の十数年は、敗北、占領の衝撃、不安定な生活環境の下で、人々は糊口、生存の面に精力を注ぎ、敗れた過去に対する回顧、追録の余裕はなかった。このような生活に追われる困難な状況は経済の復興に従って徐々に変化し、高度成長期に至るとようやく安定した小康生活の環境を勝ち取り、ここにいたって初めて、物質面と精神上的の余裕が生まれ、過去を偲ぶ、記録する活動も現れるようになった。戦友会のような、各種の旧軍人の組織が各地で再興され、郷土、地域を紐帯に旧軍人たちが集まってきた。活動はまず戦友会の名簿づくり、戦死者への慰霊活動から始まり、次第に自分たちの記録——聯隊史——作りにいったのである。この時、旧軍人たちの多くは定年またはそれに近い年齢となり、時間の余裕も出てきた。自分たちの記録を残すため、手元にある大量の戦史資料——聯隊級、大隊級、中隊級の戦闘詳報、陣中日記、報告書類、個人の日記、手記、写真、手紙など——は素材として各戦友会、軍人組織の事務局、聯隊史の編集局に集まり、それに基づく聯隊史、部隊史の編纂活動が盛んになった。

一方このような旧日本軍と戦争を記念する傾向が拭い切れない活動は当時、必ずしも行政側に支持されたとはいえず、出版する聯隊史類の書籍も、商業的価値が認められないため、すべて個人の奉仕、ボランティア活動の形で展開しなげらなかつた。出版費用は会員たちの募金、ボランティアの編集奉仕によって賄い、作られた本も、「非売品」で会員頒布以外、さばく場所はあまりなかつた。公共図書館も、地元と関係がある書物以外、積極的に受け入れなかつたようである。今日、各大学、地方の公共図書館に、この類の図書が貧弱な理由はこの背景にあったと思う。また、この種類の資料を預かるはずの防衛研究所戦史室にも、民間資料を徴集する予算も組織もなかつたようである。結局、私家版の聯隊史類が少量に印刷、発行されたものの、編集時に集まった大量の資料を計画的に収集、保管することはできなかつた。本を出版した後、資料の一部は地方自治体、防衛研究所戦史室に寄贈されたようだが、個人の日記、手記、写真など大部分はふたたび元の所有、保管者に返還され、民間に散失していった。聯隊史を編集する際、各種の資料がありすぎるほど豊富で、数十年に渉る歴史を一冊の本にまとめるには、大量な素材をどのように取捨、淘汰するかが苦労だったようであるが、出版事業が終わった後、残ったのは一冊の聯隊史だけになった。聯隊史記録の編集出版は1960年代からはじまり今日に至ると半世紀以上時間が経過した。その間世代が交代し、戦争の経験者世代はほとんどいなくなった。民間に散失した戦史資料はたとえ今日一部存在したにしても、所有者が変り、所在不明になるものが多い。聯隊史類記録の価値はすなわちここにある。かつてあった資料の手がかりとして、また各種資料の索引として、その利用価値は決して無視してはならない。

また注意すべきは、聯隊史類の出版物は、各旧軍人団体の自主的活動なので、統一な規格、体裁はなく、取材、編集、構成の方法も様々である。筆者が触れている中国地方の聯隊史の例を見れば、戦闘詳報の記録に忠実に作られた『歩兵第十聯隊史』（岡山）、『歩兵第六十三聯隊史』（松江）もあれば、個人の手記、日記、回想を重視する『歩兵第十一聯隊史』（広島）もあり、また解説、叙述風に展開する『山口歩兵第四十二聯隊史』（山口）や、散文作品のように書かれた『第四十一福山聯隊史』のような体裁もある。利用するにあたって、いちいち価値判断、史料批判、

取捨選択の作業が必要であろう。前述第二十一聯隊の『濱田聯隊史』の場合、叙述の部分に多少の感情的表現、誇張の部分が認められるが、基本的に豊富な第一次史料から再現する内容が中心なので、資料的価値は決して無視できない。なかに引用された個人記録の部分——例えば平型関の戦いの部分にある豊田志郎軍医の日記——など、今日最早入手できない史料なので、価値が非常に高いといわなければならない。このような、現在、聯隊史の記録にしか見つからない貴重な史料⁹は、珍しい平型関小寨村付近の戦闘詳報を始め、他にもたくさんある。

3. 旧日本軍の死傷者統計の信頼度について

中国では、長年の抗日宣伝と愛国主義教育を受け、一方的歴史の記述しか知らなかった多くの人びとは、日本軍の文献記録史料にある数字とこれまで自分たちが持つイメージの間の大差に戸惑い、中国側の歴史記録、教育方法を反省するのではなく、逆に日本軍の文献資料、統計数字に疑問をもつ人が多い。いわば、それは所詮、国民を騙すための「大本営発表」、日本政府の宣伝ではないか、という。なるほど、これも戦争史上でよくある現象であるが、政治的宣伝の意味から敵に与えた損害を誇張し、自ら被った損失を隠す傾向が見られる。しかし、これはあくまでも敵我对立する背景下の宣伝戦の現象であり、筆者が扱う防衛省の戦闘記録には、この問題がほとんどない。敵に与えた損害統計の面に精密さが欠ける弱点が免れないが、日本軍自身が被った損害統計に関して非常に精確であると考え。その理由は次の通りである。

まず、日本軍の損害統計は、検算、比較できない唯一のものではなく、使用目的により様々の統計が有り、互いに照合できる。台兒庄の戦いに関わる兵員の損失統計の場合、筆者が収集したものだけで二十以上に登る。いずれも大同小異である。小異とは、統計の数字ミスではなく、統計側、作者の目的や、サンプル採取の日付より来たのである。軍医部の統計は傷病者を含むより全面的な欠員状況を追求しており、この場合、同一人物の傷病と死傷は複数計算されることがある。兵器研究のための「創傷分類統計」の場合、創傷原因の分かるサンプルのみを採取するのでその結果は戦闘損失の全体統計に転用できない¹⁰。また、戦闘詳報の統計は、戦闘過程の記録としてより全面的に戦闘参加者死傷の全体(=配属部隊の死傷も計上する)を反映するメリットがあるが、局部戦闘以外の様子、配属外の部隊(例えば野戦病院、兵站自動車、通信隊、後方輜重部隊の死者)について分からない。補充員数の統計数字も概ね現在の欠員数に対するものであり、欠員の原因は戦闘によるものか、病気によるものか、事故によるものかは分からない。また師団による死傷統計は、軍からの臨時配属部隊の数を反映せず、軍の死傷集計にも方面軍に配属される臨時部隊が計上されないことが多い。

次に、防衛省戦史室にある史料の性質は決して「大本営発表」のような宣伝材料ではなく、すべて軍内部の「秘密」記録で、しかも戦闘詳報、陣中日誌のようにほとんどは事件当時の書類である。上層部の師団、軍、方面軍、参謀本部は部隊現状の把握、戦闘指導の参考などの目的から、随時に死傷統計や消耗データを求め、所属部隊また友軍全体の現状把握などに使われる。また、戦闘の消耗、損害を記録するデータは、同時に人馬、物資、弾薬補充の根拠にもなるので、その精密さも要求される。

戦闘詳報と陣中日記や、各部隊の死傷、消耗統計はあらゆる統計、報告のベースとなる基礎資料となるので、記録、集計しやすくなるため、各部隊は同じように指定された統一の様式、項目、順序で記入、提出する義務が課され、また、同じ書式の「死傷表」「陣中日誌用紙」「戦闘詳報用紙」「武器弾薬消耗表」などの用紙も、「陣中事務用品」として、定期的に各部隊に配られる¹¹。そのほか、義務教育の普及で字を書けない文盲の兵士はなく、夥しい個人の記録が残されたのも、そのためである。この意味で旧日本軍の兵員、組織、訓練、管理面の素質の高さは、中国軍よりかなり進んでいたといえる。

三、データ作成の方法、過程からみても、訂正に訂正を加え、より精確な数字になるまで、なんども修正した様子が窺える。統計データ表における「将校」数の再記入の「訂正」や、戦闘、非戦闘員の表記、軽傷で部隊非離脱者の明記や、生死不明欄の設定、少尉以上の将校死者の実名記入（戦闘詳報の場合）など、細かいところまで目を配る。

第十師団が作成した「出征以来戦死（病歿戦傷死者ヲ含ム）戦傷者表」の「備考欄」を例にしてみると、「一、本表（）内ハ将校ノ数ヲ示シ、再記セルモノトス、二、本表戦傷者中ニハ同人ノ再度負傷セルモノハ重複ノ算入シアリ、三、戦死者中ニハ戦傷死者約六三〇名平病死者約五二名含ミアリ、四、本表中ニハ軍属戦死三、戦傷者三ヲ含ミアリ」と記しており¹²、将校の死傷者数の再清查、二度負傷経験者の重複計上、統計中病死、軍属（軍人以外の文官、雇員、傭人）人数の算入など、徹底した調査、統計ぶりが窺える。

四、死傷者家族への報告、死後処理のためにも、これらの統計の存在意味は侮れない。日本軍の特徴は郷土聯隊であり、台児庄で戦った部隊は、ほとんど中国地方の郷土聯隊——岡山（第十聯隊）、松江（第六十三聯隊）、福山（第四十一聯隊）、姫路（第三十九聯隊）、広島（第十一聯隊）、山口（第四十二聯隊）、浜田（第二十一聯隊）——で、同一地域の出身者が集まり、地元で徴兵、駐屯（平時）し、聯隊区、在郷軍人会という特別の組織を通じて地元との軍民関係を維持していた。死傷による補充も地元の留守師団を通じて行われるため、死傷者家族への報告、説明や、新たな兵員の再徴収は、いくら「減私奉公」、「挙国一致」の戦時下といえども、大変な作業だったと思われる。岡山の場合、地元の『合同新聞』（山陽新聞）を通じて出征兵士の死傷は、毎日のように実名で報道される。かつて台児庄の戦いに参加した作家棟田博（第十聯隊所属）は、小説『台児莊』の解題にこう記す。

…ことに私の属した赤柴部隊（第十師団歩兵第十連隊）の損害が著しかった。当時、岡山の連隊長邸に投石があったと聞かすが、郷土の山陽新聞が連日報道する戦死、負傷者欄の氏名の夥しさは甚だしいものがあり、連隊長の留守宅が市民の怨嗟を浴びるのも無理からぬとも思われた。私は新聞に「重傷」と報ぜられた。当時、重傷と発表されるのは、すでに戦死しているのだという風評があり、私の母は、毎日、日々、仏壇の前に座りきりで動かなかったそうである¹³。

こうして死傷者のほとんどが実名で知らせられ、死者家族に対して遺骨の引き渡し、死亡報

告書の作成に丁寧が求められる。死亡の時間、場所、創傷の部位などは、戦地証言の他、各種の記録、報告書をもとに作成される¹⁴。また、これらの統計、報告も、書類による告知の根拠となる意味だけではなく、戸籍からの除籍、将来の補償、靖国神社への合祀手続き¹⁵、実績顕彰、死亡賜金¹⁶、遺族年金、傷痍軍人の証明など行政文書の根拠にもなるので、なおさら精確さが必要である¹⁷。

以上の諸点は即ち、日本軍内部の死傷統計の正確さを主張する理由である。

4. 「台兒庄大捷」の論争について

(1) 民国政府の拡大宣伝

中国における「台兒庄大捷」の歴史像の形成は、政治宣伝による事実の誇張、また、口伝、故事化の過程における人為的加工の要素が多く含まれ、文献記録資料と歴史の事実を無視した例の一つである。話はそもそも、民国政府の「拡大宣伝」攻勢から始まったことは、最近、多くの研究によって次第に明らかになってきた。

1938年4月7日朝、日本軍が台兒庄城内から撤退した直後、台兒庄における大勝の宣伝が迅速に現れてきた。最初に現れた公式の文書は、4月7日付の国民政府軍事委員長蒋介石の電報命令であろう。この時、戦場の整理をまだ行っておらず、蔣の姿勢も比較的慎重であった。「台兒庄の捷報」について、「初歩の勝利に過ぎず」「慶祝するにはなお尚早だ」という¹⁸。この時点で、国民党軍側が正面の敵部隊（瀬谷支隊・第十師団の一部、瀬谷啓少将）の全面撤退の事実を掴んだが、戦果に関する報告はまだ受け取っておらず、かつ日本軍の一部である坂本支隊（第五師団の一部、坂本順少将）もまだ戦場から撤退していなかった¹⁹。翌8日、敵の全面撤退の事実を掴むと、蒋介石は電報において、「台兒庄の勝利につき、敵寇が殲滅され、志気は高揚し、これすなわち我が側最終勝利の第一歩なり」²⁰と次第にテンションを上げていく。4月8日共産党系



の唯一の公思新聞紙（武漢）《新華日報》も、「中央通信社」よりの配信をうけ、一面で「慶祝台兒莊勝利」の見出しで大勝利を報道した。いわく、「我軍は台兒莊において空前の勝利を得、敵一万余を殲滅し、夥しい数の小銃、軽重機関銃、歩兵砲、大砲、装甲車を鹵獲した」²¹、という。

詳細な戦果に関する最初の公式報告は四日後、すなわち4月11日、国民政府軍事委員会政治部長陳誠將軍の名義で発布した。陳誠は宣伝部を管理する政治部の最高責任者であり、「拡大宣伝」のキャンペーンを仕掛けた張本人であるので、この「台兒庄の殲敵状況について」の報道はそれなりの権威性があった。曰く「日本軍の捕虜に

ついてまだ精査中だが、いま把握できる情報によると、戦場における敵の遺棄死体は五、六千名、傷病者は千五六百名、捕虜千名あまり、火砲七十門、戦車四十台、装甲車七十台、トラック百台あまり」と²²。同じ日《香港華字日報》において、蒋介石の右腕、国民政府軍事委員会副委員長長の馮玉祥將軍も、台兒庄の戦闘に関して、「敵の死傷二万人あまり、鹵獲した兵器は数えきれない」。「これは空前の大勝利で、その価値は比べものにならないほど大きい」²³と記者に話している。これらの初期報道の時間対象を見れば、一万から二万人あまりの敵死傷は、まだあくまで台兒庄戦場局部の勝利のみを指しており、いま常識となっている山東南部戦場全体の戦果（第五師団の沂州攻撃を含む）ではない。ニュース源は国民党の指導部から出たとはいえ、無稽の談であることは明らかである。ほんとうに二万人を殲滅したとすれば、台兒庄作戦を行う瀨谷、坂本両支隊は一兵も残らない計算になるからである。

このような情報はどこから、どのようにもたらされたか。陳誠將軍の部下、当時国民党政府宣伝機関である、国民政府軍事委員会政治部第三庁長郭沫若の回顧を見ればわかる。

思えば、これも運というものか。宣伝週がはじまって三日目に、台兒庄の大勝利にぶつかった。当時の軍事ニュースは次のように伝えていた。

「台兒庄当面の敵は、六日夜の我軍の総攻撃によって挟撃された。敵は天険によって頑強に抵抗したが、今朝三時に至って弾薬尽き、全線動揺した。わが軍は士気ますます上り、勝に乗じて追撃、また追撃し敵を一挙に殲滅、かくて空前の大勝を得た。この戦闘における敵の死傷二万、歩兵銃一万余、軽機九百五十、歩兵砲七十七門、戦車四十、大砲五十、捕虜無数。敵板垣、磯谷両師団の主力はすでにわが方のために殲滅された」。

抗戦すでに九カ月、初期に八路軍が平型関で輝かしい勝利を得たほかは、国民党軍はずっと陣地を移し後退また後退だった。「空間を時間に換え、小勝を積んで大勝となす」という巧妙な文句は、三歳の童児でも知っていた。だが、台兒庄でこんな「空前の大勝」を得ようとは誰一人予想したものはなかった。

飢えたものはよく食い、渴したものはよく飲む。勝利に飢えかわいていた民衆にとっては、たとえ小敗でも好いニュースなのだ。それが「大勝」しかも「空前の大勝」ときた。捕虜がこんなにも多い、しかも殲滅したのは、「板垣、磯谷両師団主力」である。もしかしたら、この戦争は勝つのじゃないかな。板垣師団と磯谷師団は敵の精鋭部隊、中国侵略の急先鋒だ。それが殲滅されたのだから。

今日からみると、このニュースは噴飯ものだ。事実のところ、敵は台兒庄一帯から戦略撤退をし、全面的進攻に備えたのだ。それをわが方の「軍師」たちが誇大にしたので、それこそまさに「拡大宣伝」だ²⁴。（傍点は引用者による）

この文からわかるように、台兒庄の大勝利のニュースは、当時の「軍事消息」すなわち「軍師たちが誇大にした」ものであり、陳誠政治部長は「新しく出来た政治部のために景気を添えるため」一万円の資金で「三庁〔宣伝庁〕に拡大宣伝をやらせた」結果であった²⁵。また、「今朝三時に

至って」の言葉遣いから見れば、この消息は4月7日当日の報道原稿であり、この時、台兒庄北東で戦う坂本支隊はまだ撤退していなかったのに、「敵の死傷二万」はまさに当事者の郭も認めた「噴飯」そのものであった。

第三庁(宣伝庁)の責任者郭沫若は、このニュースは「軍師」たちの虚構であることはわかっているが、人心の「復活」という政治的意味で、あえて台兒庄の勝利を拡大宣伝に利用した。数日後陳誠と馮玉祥の公式発言は、こうした架空の宣伝に基づいたものである。

この「拡大宣伝」は意外な輿論、人心面での効果をもたらしたため、その後、誤りは訂正されるどころか、次第に固定化され更に輪を広げて、拡散して行った。のち何応欽(1938年当時、軍事委員会参謀総長)は《八年抗戦之経過》において、台兒庄の戦いで「敵三万あまりを殲滅し、残った一万人は北に向けて敗走した」とし²⁶、李宗仁(第五战区司令長官、台兒庄作戦の最高責任者)も回憶録において、台兒庄の役で「敵の死傷者総数は二万人以上であろう」と記した²⁷。この種の「拡大宣伝」は国内の輿論界を賑わしただけではなく、日中戦争で国民政府に同情的だった多くの欧米系メディアによって海外に広められ、「アジアのワートルローの戦い」(《明星晩報》)、「世界史的の重大決戦の一つ」(《華盛頓日報》)²⁸であると、謳われるようになった。

(2) 日本における「台兒庄戦闘敗北論」の形成

中国国民政府の拡大宣伝は世界中に広まり、大きな輿論効果をもたらしたので、日本の輿論および日本軍をして逆にこの戦いに注目せざるを得ない事情が発生した。損害の程度はとにかく、日本軍の台兒庄戦場からの撤退は事実だからである。事情説明の意味を含め1939年、台兒庄作戦時の第二軍参謀岡本清福大佐は、東京九段の軍人会館における内部報告会において、この日本国内でも関心が高まる話題を取り上げた。使われた説明資料は、第二軍の機密作戦日誌で、問題にしたのは瀨谷支隊の「後方機動」(撤退)の理由であった。当時第二軍の参謀たち(岡本清福ら)の「判決」では、この不可思議な行動を誘引したのは、「瀨谷支隊は元々坂本支隊に対する信頼が薄かった」という、両支隊長の間の「信頼」関係であり、また「反転」理由は「瀨谷支隊は正に戦争の真最中で今[坂本支隊が]行かれたなら乃公が困まる」という、坂本支隊の「反転」通知に対する瀨谷支隊長の「不安の念」にある、とした。岡本は軍の作戦指導の責任を否認し、第二軍側が瀨谷支隊に対して退却命令を下達したのではなく、作戦部隊の補充も順調に行われている。結局、両支隊の心持ちは「其の間全く不可解なものがあって結局分らない」という²⁹。ここで問題視されたのは、命令を受け「反転」する第五師団坂本支隊の問題ではなく、無断に撤退を命令した第十師団瀨谷支隊長の行動である。それは、あきらかに「軍命違反」の行為であるというのが、岡本清福報告の要領であった。報告会が開かれたのは、台兒庄の戦いの一年後であり、作戦不利の日本軍のメンツを維持するため、戦場撤退の責任を、支隊間の信頼関係や、また一個人(瀨谷啓支隊長)に押し付けようとする感があった。

この時に発生した、瀨谷少将個人が責任を取るべきだという認識はその後受け継がれ、戦後の戦史研究にまで尾を引いた。戦後の復興を果たした後、日本国内では旧日本軍の戦史に目を向ける著書が現れた。大陸侵略と敗戦の事実を鑑み、旧日本軍内部の体質問題を取り上げ批判

する論が多い。1958年、軍事評論家伊藤正徳は著書『軍閥興亡史』において、台兒庄の戦いに触れ、瀬谷支隊の撤退理由についてこう述べた

…軍司令部は台兒荘の占領を作戰目的として命令したわけではなく、況んやその死守を要求する理由もなく、また作戰再検討の時間もなかった。死守を命令するくらいなら、先ず坂本部隊を瀬谷の指揮下に入れ、全兵力を統一して戦うことを指令しなければならない。しかるに、第五師団の方は難戦中に御先きに失敬して、第十師団の一部だけが、偶然の占領地で生命を投げ出す義理はない。というのが一応の結論であろう。ただ軍の指令を仰がずに独断退却したことが瀬谷の責任を問われる理由となった。そうして陸大出の俊才、そのまま進めば、太平洋戦争の頃には総軍の参謀長か、少くとも主要なる軍司令官となるはずの少将は、予備役に編入されて永く其後の戦線から姿を消した。「退却」という事実には弁明を許さない伝統が陸軍には生きていたのである³⁰。（傍点は引用者による）

伊藤はここで日本軍の「敗北」の実態に触れておらず、また中国側の「拡大宣伝」の内容を是認したわけではない。瀬谷の撤退命令についてもその必要と判断の正しさを評価している。問題にしたのは日本軍内部の独断行動、作戰の不調和、意見、行動はなかなか統一できないという作戰指導体質面の問題である。すなわち、一、「南部山東剿滅作戰」（台兒庄作戰）の開始や、台兒庄の攻撃はそもそも現地部隊の独断行動によって起こされたもの、二、作戰不利の状況下で、瀬谷支隊長は命令を受けず勝手に撤退命令を下達したこと、三、そのため瀬谷は問責され、予備役に編入された、と。前記岡本清福の瀬谷個人責任論に対して、日本軍全体の体質批判は論の特徴であるが、日本軍撤退の事実を明確にし、また瀬谷支隊長が問責され予備役に編入した虚構を作り、のち台兒庄敗北の論争を呼ぶことになる。

1960年代以降の専門書、歴史読本の記述にも、伊藤の説は継承された。1962年秦郁彦はその著作『日中戦争史』において、

〔1938年3月〕一七日臨城を占領した瀬谷支隊は「韓荘および台兒荘附近大運河の線を確保すべし」との師団命令によって限界線を超越し、先遣隊は二七日台兒荘（徐州東北約三〇キロ）に突入し、その一角を占領したが、有力な砲兵に掩護された堅固な陣地に拠り、ぞくぞくと増加する優勢な中国軍に包囲されたので、第二軍司令部は沂州を包囲攻撃中の坂本支隊に増援を命じた。同支隊は四月二日台兒荘の東方に進出したが、中国軍の抵抗ははげしく、両支隊は苦戦に陥った。しかし現地の情勢を十分に知悉しなかった第五師団は、この方面の戦闘はほぼ終了したものと判断して坂本支隊は沂州へ反転することを命じ、五日、支隊は戦場から離脱すべき旨を通報したので、瀬谷支隊は独力で台兒荘を維持することは困難であると判断して六日夜から嶧県方面へ後退した。

もともと台兒荘は、軍が指定した進出指令線の南方にあり、同地を占領する任務は与えられていなかったにもかかわらず、陸軍は瀬谷支隊の退却が日本軍の伝統を破壊するもの

としてまもなく瀬谷少将を予備役に編入した³¹。(傍点は引用者による)

秦郁彦の研究は、前記伊藤正徳の論より厳密かつ客観的であり、坂本支隊の撤退は、4月5日師団からの命令であったこと、そのため瀬谷支隊は独力で戦えず撤退を余儀なくされたことなど、いままで知られなかった戦局の様子を正確に把握しているが、瀬谷の独断進出と独断撤退、およびのち問責され予備役に編入された記載は、伊藤正徳の説を援用したものと思われる。

1967年2月、中央公論社から二つ台兎庄の戦いに触れる書籍が出版された。ひとつは『日本の歴史』シリーズ中の『太平洋戦争』の巻であり、執筆したのは東京大学教授林茂であった。いわく

さて山東掃蕩作戦に従事していた第二軍の先頭は、目の前に有力な敵がいるということで、参謀本部が指示した線をこえて南下、三月二十七日、第十師団瀬谷(啓)支隊は徐州東方の台兎庄攻撃を開始した。しかし、これを迎えうったのは予想をこえる大軍であり、瀬谷支隊は一時、台兎庄を占領したものの、包囲攻撃を加えてくる中国軍の圧迫にたえかねて、四月六日には退却を開始した。この戦闘は中国軍の大勝利として世界に宣伝され、瀬谷少将は責任を問われて予備役に退けられた³²。(傍点は引用者による)

専門書ではなく、通史の中の一節で、詳しく書いてないが、日本軍の撤退(敗北)と瀬谷の問責に関して、前出伊藤、秦の論に沿うものであった。

5月、同じ中央公論から臼井勝美の新書『日中戦争』も出版され、台兎庄の敗北について次のように描いた

北支那方面軍第一軍は、三月上旬には山西および河南両省において待望の黄河の線に到達、第二軍も津浦沿線を南下しつつあったが、臨城占領(三月十七日)後、台兎庄(徐州の東北三十キロ)に突入した第十師団の瀬谷支隊と、その救援におもむいた第五師団の坂本支隊が、優勢な中国軍に包囲されて重大な損害を受け、退却を余儀なくされる事件が発生した。

津浦沿線は、李宗仁を長官とする第五戦区であるが、蔣委員長は、湯恩伯をして第八五軍王仲廉部、第五二軍閔麟徵部を率いて応援に向かわしめ、孫連仲軍も参加して、国民政府軍としては、いわば最初の勝利をえたのであった。対日戦開始以来九箇月を過ぎ、抗戦初期に平型関で共産軍が勝って以来、撤退に撤退をかさねてきた中国側にとって、包囲殲滅の成功はまさに待望の大勝利であった。漢口では捷報がもたらされた七日夜、数十万人が参加して炬火行列が挙行され、歌声、爆竹の音を高らかに響かせて、抗戦の勝利を慶祝したのであった³³。(傍点は引用者による)

臼井の論は、日本軍の敗北と、中国軍の「大勝利」を明確に認めた最初の論であった。

(3) 赤柴八重蔵の反論と二つの貴重な戦闘詳報

このような台兒庄敗北論に対する日本国内最初の異議申し立ては、当時瀨谷支隊配下の第十聯隊長赤柴八重蔵であった。台兒庄の戦いの後1938年6月、少將に昇進して陸軍士官学校に転出し、その後近衛第一師団長（中將）をへて、1944年第五十三軍司令官になって敗戦を迎えた。赤柴は、この時（1967年2月）75歳、丸一鋼材の取締役をしていた。林茂の『太平洋戦争』を読んで「台兒庄敗北」論にショックを受けた。そして旧陸軍の名誉挽回に奮起、中央公論社を通じて執筆者の林茂と複数回会い、熱弁を繰り返した。この間自ら保管した歩兵第十聯隊の戦闘詳報、及び安田亨介（戦闘当時第六十三聯隊副官）が保管した歩兵第六十三聯隊の戦闘詳報（のコピー）を証拠として示して論争し、その結果、ついに林茂及び白井勝美をして、著書の該当部分を訂正させ、釈明させた。この経緯について『歩兵第十聯隊史』には以下の記載がある。

昭和四十二年二月東京・新宿紀伊国屋書店で、最新刊の「日本の歴史」第二十五卷（林茂著、中央公論社発行）を購求した。それは「台兒庄の敗戦」なる題目を発見したからで、まさしく寝耳に水であった。その後同年四月十八日岡山に於て挙行された赤柴・毛利部隊慰霊祭に参列したとき、郷土でも問題になっていた。「勝った」と一途に思い込んでいる者に、「お前は負けとるじゃないかと書かれて、見返すことができるものではない。これは単に歩十とか歩六三とかという問題ではない。国軍の声価に波及すべきことで、また歴史を誤まるものである。赤柴元聯隊長の精力的な活動が始った。磯谷師団長、瀨谷支隊長、福栄歩兵第六十三聯隊長は既に物故されている。現存者として最高責任は赤柴元聯隊長ひとりにかかっている。当時の聯隊戦闘詳報並に安田元歩兵第六十三聯隊副官の保管にかかる同聯隊戦闘詳報、関係者の証言などを資料に、著者と出版元に交渉した結果、誤謬は削除訂正された³⁴。

赤柴と林の論争は、本を出版した後なので、テキストは直しようがなかったが、林茂は1967年9月刊行した『日本の歴史』別巻5の付録月報において、次のような釈明をした。

私が見た日中戦争関係の記録には「現代史資料—日中戦争5」、堀場一雄「支那事変戦争指導史」、秦郁彦「日中戦争史」、伊藤正徳「軍閥興亡史」などがありますが、台兒庄の戦いの評価については、「現代史資料」所収の当時の第一軍参謀岡本清福大佐の回想録と参謀本部員だった堀場氏の著作に拠りました。瀨谷少将の責任の件は後二者にありました。しかし御指摘により、調べますと、瀨谷氏は、台兒庄の戦いの後、武漢作戦に従い、14年10月に中將に昇進されています。この点間違いをお詫びし、訂正します。また、「敗戦・退却」の件については、ご紹介により、当時の瀨谷支隊歩兵第十聯隊長だった赤柴八重蔵氏から再三にわたり戦闘の状況を伺い、「戦闘詳報」を見せていただきました。赤柴氏はまた同じ瀨谷支隊に属し、台兒庄攻撃に主役を演じた歩兵第六三聯隊の副官だった安田亨介氏から六三の「戦闘詳報」の写しを取り寄せて下さいました。それらを総合しますと、「退却」は、

救援に来た第五師団坂本支隊が敵四箇師の重圍に陥ったのを応援するためや、高地に拠って観測する敵の砲撃から損害を少なくするためや、次の会戦に備えて兵力を温存し、いかなる態勢にも応じられるようにするためなどの、状況認識と目的をもった兵力転用であることが分りました。また、瀬谷支隊が大本營の指示した線を超えて南下したのは第二軍の命令に基くことも分りました³⁵。

四年が経った1971年、同書の第二版が出た際、林は内容に関して以下のような訂正を行った：

三月二十五日、第十師団瀬谷(啓)支隊は徐州東北方の台兒莊に対して攻撃をはじめ、一時その大半を攻略するにいたった。しかし、敵は予想を越える大兵力であり、また、その東側に行動中重圍におちた第五師団坂本(順)支隊救援のため、四月六日、日没直ちに福栄連隊の主力を転用した。そして、台兒莊内外にある支隊の大部は台兒莊西北の泥溝に集結した。この戦闘は中国軍の大勝利として内外に「拡大宣伝」された³⁶。(傍点は引用者による)

「敗北」に触れず、「撤退」も友軍に脅威を与える敵を撃破するための兵力「転用」とし、撤退を意味する「転進」も「泥溝に集結」と表現を和らげた。この訂正の根拠は、第六十三聯隊の戦闘詳報であった。

同じように、白井勝美も赤柴八重蔵提供の戦闘詳報を解説して著書『日中戦争』の増補版において次のように訂正した。

臨城占領後第十師団の瀬谷支隊(赤柴・福栄兩部隊)は、増援された精銳湯恩伯軍を攻撃敗走せしめたが、台兒莊の堅陣による優勢な中国軍は頑強に抵抗し、福栄部隊と連日死闘を繰り返した。台兒莊に突入した福栄部隊第二大隊の三月十九日より四月六日までの死傷者は全員一一二五名中五一四名に達した。しかし救援に赴いた第五師団の坂本支隊が却って有力な中国軍に包圍され、「悪戦」の状況になったので、瀬谷支隊は四月六日戦線を整理し、台兒莊攻略部隊を「戦場離脱」せしめ北方に転進、坂本支隊の右側背後を脅威する中国軍を攻撃せしめたのである。(歩六十三連隊戦闘詳報)。対日戦後、撤退に撤退をかさねてきた中国側は、日本軍の進撃を渋滞せしめたので、大勝利として台兒莊の戦いを宣伝し、七日夜には武漢で祝勝の炬火行列を挙行したりしたのである³⁷。(傍点は引用者による)

前の中国軍の「重大勝利」説を訂正したのは、白井修正の要点であり、「戦場離脱」、「転進」など日本軍の表現をそのまま使い、転進後の作戦——坂本支隊の右側背後を脅威する中国軍攻撃——も、戦闘詳報の通りに引用した。修正の根拠は、同じく赤柴八重蔵から提供された歩兵第六十三聯隊の『戦闘詳報』であった。

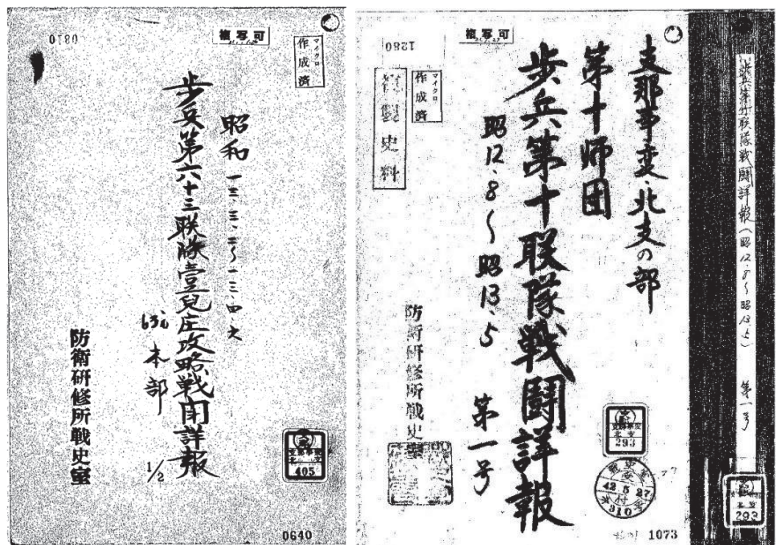
以上の論争における赤柴八重蔵と林茂、白井勝美との攻防の仔細はわからないが、訂正の結

果から見れば、赤柴が要求したのは、一、瀬谷啓少将に対する問責、処分の記載の訂正である。この件はもともと伊藤正徳の記述から広められた無根拠な話であるので、すぐ訂正され、釈明が行われた。二、日本軍の敗北説の否定。これに関して、林も、白井も概ね撤退、敗北説を目的ある「転進」の線に改めたが、作戦における日本軍側の「不利」「苦戦」という点において譲歩しなかった。戦闘詳報を手に入れた白井勝美は、むしろ戦闘詳報中の統計を活用し、台兒庄城内第二大隊の苦戦の様子(死傷概率)をさらに具体化したのであった。

この論争に巻き込まれた旧陸軍側の証人には、また大本営参謀本部の参謀、当時の作戦課長稲田正純中佐がいる。稲田はかつて強硬の作戦推進派であり、穏健派の河辺虎四郎の後任として作戦課長に就任するや、これまでの戦線不拡大の作戦方針を転換させ、南部山東剿滅作戦を強引に推進した人物であった。稲田は証言において、台兒庄の撤退は戦略的転進で、正しい判断であったと、つぎのように論じた。

〔台兒庄の戦闘で〕 瀬谷、坂本両支隊の台兒庄からの後退は戦況から見て当然である。当時、方面軍や第二軍がなぜもっと早く後退させぬかと、じれったい感じていた。台兒庄からの後退は敗退ではなく、いずれ下がることは大本営と初めからの約束であるから問題にしていない。台兒庄方面に「湯恩伯軍出現」の情報を得たとき、これはえらいことになった、前に出過ぎている第二軍の一部を早くまとめないと危ないと心配した。湯恩伯軍の出現は蒋介石主力が決戦を求めてきたことを意味するからである。瀬谷、坂本両支隊が危機を脱して後退したので、安心するとともに、敵の主力を寄せつけた結果となったので、それでは徐州作戦をやろうということになり、急いで準備に取り掛かった³⁸。

要するに、日本における台兒庄敗北の論争は、中国側の「拡大宣伝」の内容と接点はなく、それは一方的宣伝であるとの認識が最初から一致していた。論争の焦点は、撤退の評価とその原因分析にあり、また瀬谷問責という間違った記載に対する是正要求にあった。旧軍人たちは日本軍の台兒庄からの撤退を敗北として認めないが、対して研究者側は日本軍の作戦失敗、撤退の事実を強調した。結局、論争は史料証拠の前に円滑に収まり、すくな



くとも台児庄作戦における日本軍「敗北」「潰退」のイメージは払拭されたと言える。この論争の意義は、苦戦による日本軍の撤退行為をどのように表現するかではなく、筆者にして見れば、むしろ論争して初めて埋没された貴重な資料——瀬谷支隊の二つの完全かつ詳細な戦闘詳報——が見つかり、かつ役目を果たした後大事に保管されたことではないか。論争の前、第十聯隊の戦闘詳報は元聯隊長赤柴八重蔵個人が所有しており、第六十三聯隊の戦闘詳報も、元聯隊副官安田亨介によって秘蔵されていた。論争のおかげでこの二つの史料は証拠として提出され、論争後そのまま防衛庁戦史資料室に寄贈されることになった。第十聯隊の戦闘詳報にある受け入れの刻印は昭和42(1967)年5月27日になっており、ちょうど、台児庄論争のすぐあとであった³⁹。もしこの論争がなければ、我々は今日になってもこの二つの貴重な資料の在りかを知らなかったであろう。赤柴八重蔵は論争後、聯隊史の編集協力にも精を出すようになり、10年後の1977年1月死去した。享年84歳。

注

1. 平型関大捷の記念館は2001年、共産党中央宣伝部から「全国愛国主義教育の示範基地」と指定され、台児庄大戦記念館も、落成後1996年9月国家教育委員会、文化部、解放軍政治部などによって「全国中小学校愛国主義教育基地」と指定され、1997年6月共産党中央宣伝部から「全国愛国主義教育の示範基地」に指定されている。
2. 例えば、防衛省防衛研究所戦史室の文献史料が公開されてから、中国国内における平型関大捷の「殲敵」数は、精銳部隊の4000から3000、さらに輜重部隊をふくむ1000人前後に訂正され、台児庄大戦の「殲敵」数も、数万人から日本の戦史資料を利用して一万前後に訂正した。
3. 以上の「修正」にも多くの間違い、誤解があることは、拙論《台児庄戦役日軍死傷者数考》《歴史学家茶座》山東人民出版社、2014年12月を参照。
4. 憲兵司令部編『日本憲兵昭和史』原書房、1978(明治百年史叢書:第278巻)、271頁。
5. 「歩兵第二十一聯隊損耗表」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11111184000.No.076.
6. 『濱田聯隊史』、歩二一会、1973年、62頁
7. 日本軍による陸奥作戦中の犯罪行為について、拙論「陸奥作戦における日本軍の虐殺記録——日本軍資料の盲点をつく」『年報日本現代史』第20号、2015年5月。
8. 軽部運代・長崎洋「国立国会図書館所蔵近代日本軍事関係名簿類目録」『参考書誌研究』第74号、国立国会図書館主題情報部、2011年3月、参照。
9. 一例を挙げれば、小寨村伏撃の場面と戦闘経過、死傷を記録した、兵站第六自動車本部第二中隊(中西学隊長)の戦闘詳報である。中国共産党の「平型関大捷」研究にもっとも重要な文献記録史料であるが、今その在処がわからず、「抜粋」部分のみ、沢田久一編『宇都宮輜重史』(1973年)に見られる。
10. 「2A方面(兵站)参考諸表」(昭和13年6月)、367頁、「備考欄」を参照。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C111111485400.
11. 昭和13年「陸支密大日記65号」「陣中事務用品其他追送に関する件」1267、1274頁、参照。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C04120673700.
12. 「師団戦闘力充足の概見」前掲JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11111033000.
13. 棟田博「自作・解題」「台児庄ほか」(月報)『台児庄・ほか五編』光人社、1975年。
14. 「戦死者に関する参考」昭和14年5月以降 第3中隊、参照、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11111555800.
15. 「靖国神社合祀名簿記載要領」歩兵第40連隊、参照、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11111555900.
16. 「死歿者特別賜金賜与ニ関スル件」支那事変第2軍兵站関係書類JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11110529300.

17. 「死歿者ニ関スル手續指導方ノ件」書類一式を参照、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C01001580500. 大日記甲輯昭和13年。
18. 《香港華字日報》1938年4月8日、《台兒庄会戦》第二次中日戦争各種重要戦役史料彙編台北：国史館、中華民國73年7月、4頁より引用。
19. 瀨谷支隊於4月6日夜撤退、坂本支隊於4月7日夜撤退。
20. 国防部編《抗日戦史》徐州会戦3、前掲《台兒庄会戦》5頁より引用。
21. 社論「慶祝台兒莊勝利」《新華日報》1938年4月8日。
22. 《香港華字日報》1938年4月11日、14日、前掲《台兒庄会戦》、112頁より引用。
23. 《香港華字日報》1938年4月11日、前掲《台兒庄会戦》、122頁より引用。
24. 郭沫若（岡崎俊夫訳）『抗日戦回想録』中央公論社、1969年、49-50頁。
25. 前掲郭沫若（岡崎俊夫訳）『抗日戦回想録』、48頁、52頁。
26. 何応欽編著《八年抗戰之經過》台湾：文海出版社、1972年、42頁。
27. 唐徳剛撰写《李宗仁回憶録》広西師範大学出版社、2005年、537頁。
28. 《香港華字日報》4月14日、前掲《台兒庄会戦》122頁より引用。
29. 臼井勝美、稲葉正夫編『現代史資料』12、日中戦争4、みすず書房、2004年、520-522頁。
30. 伊藤正徳『軍閥興亡史』3、文藝春秋新社、1958年、78頁。
31. 秦郁彦『日中戦争史』河出書房新社、1961年、289頁。
32. 林茂『太平洋戦争』日本の歴史 第25巻、中央公論社、1967年2月初版、67頁。
33. 臼井勝美『日中戦争/和平か戦線拡大か』中央公論社[中公新書]、1967年5月初版、67-68頁。
34. 『歩兵第十聯隊史』、同刊行会、1974年、695頁。
35. 『日本の歴史別巻5』附録、昭和四十二年九月発行。この付録月報が手に入らないので、内容を『歩兵第十聯隊史』600頁より引用した。
36. 林茂『太平洋戦争』日本の歴史 第25巻、中央公論社、1971年2月版、67頁。
37. 臼井勝美『日中戦争—和平か戦線拡大か』中央公論社、1980年版、67-68頁。
38. 『戦史叢書 支那事変陸軍作戦〈2〉昭和十四年一月まで』防衛庁防衛研修所戦史室著、朝雲新聞社、1975年、44頁。
39. 「歩兵第十連隊戦闘詳報 第1号」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11111167000.

